

**雑誌メディア研究の現状と課題--竹内洋・佐藤卓己
・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌-教養メディアの盛
衰』(創元社、2014年)を題材にして**

著者	片山 慶隆
雑誌名	研究論集
巻	103
ページ	137-144
発行年	2016-03
URL	http://doi.org/10.18956/00006016

雑誌メディア研究の現状と課題

～竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌—教養メディアの盛衰』
(創元社、2014年)を題材にして～

片山慶隆

一 はじめに

本稿の目的は、竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌—教養メディアの盛衰』(創元社、2014年。以下、本書)を題材にして雑誌研究の現状を整理し、課題や展望を示すことである。なお、本書によれば、論壇雑誌とは、「政治・経済から文藝・哲学・科学まで部門を限定せず掲載し、一つの体系をあたえる高級評論誌」、いわゆる総合(総合)雑誌のことである(序論、1頁)。

まずは、雑誌メディア研究の現状に目を向けてみよう。近年、メディア史では雑誌研究が非常に盛んである。馬静『実業之日本社の研究—近代日本雑誌史研究への序章』(平原社、2006年)、阪本博志『「平凡」の時代—1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』(昭和堂、2008年)、山本昭宏『核エネルギー言説の戦後史1945-1960—「被爆の記憶」と「原子力の夢」』(人文書院、2012年)、岡田章子『「女学雑誌」と欧化—キリスト教知識人と女学生のメディア空間』(森話社、2013年)、中川裕美『少女雑誌に見る「少女」像の変遷—マンガは「少女」をどのように描いたのか—』(出版メディアパル、2013年)など、経済雑誌、大衆娯楽雑誌、科学雑誌、あるいは女性雑誌、少女雑誌の分野でも続々と研究が発表されている。さらに、『物語岩波書店百年史』全3巻(岩波書店、2013年)でも岩波書店が発行した雑誌にあらためて注目が集まった¹。いかに多様な雑誌が研究対象となっているかは、吉田則昭・岡田章子編『雑誌メディアの文化史—変貌する戦後パラダイム』(森話社、2012年)でも伺うことができる²。

では、本書が扱う論壇雑誌はどうであろうか。論壇雑誌については、佐藤卓己『「キング」の時代—国民大衆雑誌の公共性』(岩波書店、2002年)、奥武則『論壇の戦後史1945-1970』(平凡社新書、2007年)、竹内洋『革新幻想の戦後史』(中央公論新社、2011年)、根津朝彦『戦後「中央公論」と「風流夢譚」事件—「論壇」・編集者の思想史』(日本経済評論社、2013年)などで言及されている。だが、本書によれば、ほぼ「未開拓の研究領域」(あとがき、312頁)であった。

もっとも、雑誌研究が隆盛を迎える一方で、雑誌をめぐる現状は厳しい。売り上げのピーク

だった1996年を過ぎてからは年々販売部数を減らし続け、この15年ほどで約三分の二にまで縮小してしまっている。

本稿では、このような雑誌研究や雑誌の現況を踏まえながら、本書の内容紹介にとどまらず、雑誌メディア研究を進展させ得る展望を示したい³。

二 本書の内容

内容を紹介する前に、まずは本書の構成を示す。以下のように、本書は本論が三部十一章から成り立っている。四年間に及ぶ共同研究の成果だけに、バランスのとれた構成になっている。

序論（竹内洋）

第一部 論壇のフォーマット

第一章 『中央公論』——誌運の法則（竹内洋）

第二章 『文藝春秋』——卒業しない国民雑誌（井上義和）

第三章 『世界』——戦後平和主義のメートル原器（佐藤卓己）

第二部 論壇のアキレス腱

第四章 『婦人公論』——お茶の間論壇の誕生（稲垣恭子）

第五章 『暮しの手帖』——山の手知識人の覇権（佐藤八寿子）

第六章 『朝日ジャーナル』——桜色の若者論壇誌（長崎励朗）

第七章 『ニューズウィーク日本版』——論壇は国際化の夢を見る（松永智子）

第三部 論壇のフロンティア

第八章 『諸君！』——革新幻想への解毒剤（井上義和）

第九章 『流動』——新左翼系総会屋雑誌と対抗的言論空間（大澤聡）

第十章 『放送朝日』——戦後京都学派とテレビ論壇（赤上裕幸）

第十一章 「ネット論壇」——論壇のデジタル化とインターネット（富田英典）

あとがき（佐藤卓己）

『日本の論壇雑誌』関連年表（白戸健一郎）

では、本書の内容紹介に入ろう。

第一章「『中央公論』——誌運の法則」では、『中央公論』と各時代のライバル誌である『太陽』『改造』『世界』『諸君！』との関係を分析している。戦前期に『中央公論』は民本主義を唱えた吉野作造らを常連執筆者に迎えることで絶頂期を迎えた。だが、より急進的な社会主義やマルクス主義の論客を執筆陣に起用した『改造』に押されることになった。また、戦後は60

年代に保守主義路線で再びブームを起こしたが、次第にもっと保守的な『諸君！』などが台頭してくることになる。『中央公論』は論壇の新しい潮流を生み出すことで発行部数を伸ばすが、穏健な論調のため、もっと先鋭な論調を特徴とする雑誌に乗り越えられたのである。

第二章『『文藝春秋』——卒業しない国民雑誌』は、戦後になぜ『文藝春秋』は「国民雑誌」になり得たのかを考察している。同誌は、50年代は高学歴の若者に強く支持されていたが、その後、読者の年齢が高くなり、国民各層に広く受容されるようになる。そして、『文藝春秋』が息の長い読者を多数抱える「卒業しない国民雑誌」となったのは、〈成熟した大人〉が交歓するサロンのような「同級生的公共性」が開かれているからだと本章は述べている。

第三章『『世界』——戦後平和主義のメートル原器』は、敗戦直後に創刊された「総合雑誌」の中で唯一現存する『世界』を分析している。当初は「大正教養主義的総合雑誌」だった同誌は、吉野源三郎編集長のもとで平和運動に積極的に関与するようになり、「戦後民主主義的総合雑誌」に変化した。『世界』の論調の背景には、戦後論壇の中核に平和論を位置づける「八・一五」史観があり、50年から敗戦特集である「八・一五」イベントを恒例化していった。

第四章『『婦人公論』——お茶の間論壇の誕生』は、代表的な女性論壇誌である『婦人公論』を取り上げる。論壇雑誌が「お座敷論壇」であるのに対して、同誌の「お茶の間論壇」では女性、家族、性といった生活に密着したテーマが議論され、多くの読者を獲得した。お茶の間論壇では、評論家、芸能人、大学教授などが専門分野とは異なるテーマを議論し、「お茶の間文化人」として活躍するようになった。

第五章『『暮しの手帖』——山の手知識人の覇権』は、総合雑誌が不振に陥る中で隆盛を誇り、2016年も現役の雑誌である『暮しの手帖』を扱っている。同章は、『暮しの手帖』の成功を、ほんの少し「上から目線」の文体が「山の手」への憧れをかき立てる差異化装置として機能したことを指摘する。

第六章『『朝日ジャーナル』——桜色の若者論壇誌』では、ネットワークの要素同士の関係を記述し、その位置特性を分析する手法である「ネットワーク分析」が採用されている。同章では、分析の結果、69年の『朝日ジャーナル』は左のクリーク（派閥）に属しながら架橋するクリークにも属す「桜色の論壇誌」であり、84年は全てのクリークに属することで思想的に脱色され、結果的に論壇の中心に位置する雑誌になったと結論づけている。

第七章『『ニューズウィーク日本版』——論壇は国際化の夢を見る』は、アメリカの雑誌の地域版である『ニューズウィーク日本版』を分析する。同誌は日本を超える視点で国際誌ブームを起こすきっかけとなった。しかし、読者が求めたのは外国、特にアメリカから見た日本像であり、日本の popularity（評判）を確認する媒体だったのである。

第八章『『諸君！』——革新幻想への解毒剤』は、69年に創刊した戦後の代表的な保守系論壇雑誌の『諸君！』を取り上げる。創刊時の『諸君！』は、リベラルな意見が主流を成す言

論界で、「世の中どこか間違っている」と問題提起した「反体制」の雑誌であった。本章では、読者の回想を史料としながら、若者がどのように『諸君！』の保守思想に接近したかが描かれており、興味深い。

第九章『『流動』——新左翼系総会屋雑誌と対抗的言論空間』では、本章の中では最もマイナーな雑誌である『流動』を扱っている。69年に創刊された『流動』など新左翼系の雑誌は、いずれも急進的な論調を特徴としながら、総会屋的な活動で経営を維持していた。82年に改正商法施行によって一気に廃刊に追い込まれる雑誌群を、本章では「後発誌」をキーワードに分析している。

第十章『『放送朝日』——戦後京都学派とテレビ論壇』は、54年から75年に発行されていた朝日放送（大阪）のPR誌である『放送朝日』を分析する。発行部数は最大でも一万部という少数の雑誌ではあったが、京都大学の知識人たちがマクルーハン理論など最先端の理論を紹介し、未来学を構想した意義を明らかにしている。

第十一章『『ネット論壇』——論壇のデジタル化とインターネット』は、二十一世紀になり、大きな影響力を持っているインターネットの「論壇環境」を扱っている。近年、論壇雑誌の休刊が相次いでいるが、インターネットではニュース・サイトや匿名のブログや掲示板が多くを占め、必ずしも論壇の代替機能を果たしていない。そのため、輿論形成のために、専門家やジャーナリストによって言論空間としての論壇サイトが登場している現状が紹介されている。

三 雑誌メディア研究に関わる論点

では、本書の内容を踏まえて、雑誌メディア研究を進展させるために有益だと考えられる論点を以下にあげていこう。論点は七つある。

第一に、そもそも、なぜ雑誌研究は盛んになったのであろうか。相次ぐ休刊で雑誌の歩みが「歴史」になったからかもしれないし、本書の執筆者の大多数が論壇崩壊後の「ポスト論壇世代」（あとがき・313頁）であるように、特定の雑誌への思い入れの少ない研究者が増えてきたことも一つの要因かもしれない。だが、真っ先に考えられるのは、雑誌の復刻など史料状況の改善、データベースの活用など研究環境の変化である。

歴史研究は、史料なしには成り立たない。それゆえ、史料状況の改善は非常に重要な要因である。本書には関連する論稿は収められていないが、近年の復刻で見逃せないのは『改造』の復刻であろう⁴。戦前期を代表する雑誌でありながら研究が遅れていると言われてきた『改造』だが、これで本格的な研究を行なえる条件が整った。もちろん、史料復刻を待つだけでなく、研究者は自ら積極的に史料を掘り起こすことも必要である。

また、インターネットの普及は研究に計り知れない影響を及ぼしている。必要な書籍や雑誌

がどの大学に所蔵されているのか、どの古書店で売られているのかが、現在では瞬時に調べることができる。また、日本だけでなく、外国の文書館に所蔵されている史料も、現地に行かずに検索可能なことが少なくない。

本書との関連では、第六章の論文はデータベースの活用なしには書くのが難しかったであろう。ただし、橋元良明氏が『メディアと日本人—変わりゆく日常』（岩波新書、2011年）の「あとがき」で、「正直言ってネットの助けがなければ書けなかった。しかし、ネットがなければ、もっと早く書けた。ネットは、ありあまる知識を与えてくれる一方で、惜しみなく時間を奪う」（194頁）と述べているように、インターネットは諸刃の刃である。6年前に歴史専門誌が「日本史研究とデータベース」の特集を組んでいるが⁵、雑誌メディア研究でもインターネットの効果的な利用方法について議論を深める必要がある。

第二に、他誌との比較である。本書では、対象とする雑誌と他誌との比較が多くの章で行なわれている。

例えば、第一章では、『中央公論』と各時代のライバル誌『太陽』『改造』『世界』『諸君!』との関係が論じられる。また、第二章では、同じ「国民雑誌」である『文藝春秋』と『キング』の共通点と相違点が述べられ、なぜ後者が終刊したのに前者は今でも刊行されているのかを明らかにしている。ほかにも、第六章では、ネットワークの要素同士の関係を記述し、その位置特性を分析する手法である「ネットワーク分析」によって（168頁）、『朝日ジャーナル』の論壇での位置づけを探り⁶、第七章では『ニューズウィーク日本版』という「外国」メディアと日本のメディアとの緊張関係が描かれ、第九章では、新左翼系総会屋雑誌という一群の雑誌の中での『流動』が論じられている。

実証的な歴史研究では、どうしても特定の一誌を分析することに注意が向いてしまう。もちろん、それは歴史研究としての精度を高めるためにはやむを得ない面がある。しかし、当然のことだが、ある雑誌の特質を分析する際に、比較の視座は有益である。比較と言っても、第一章や第二章のように、雑誌間の対抗関係だけでなく、第八章の『諸君!』と『正論』のような共闘関係もあり得る。また、第十章では、『放送朝日』に掲載された梅棹忠夫の「情報産業論」が『中央公論』に転載されて注目された事実が紹介されている（274頁）。このようなマイナー誌からメジャー誌への転載や執筆者の移動といった視点も、雑誌間の関係を検討する際には留意した方が良好であろう。

第三に、基礎データの重要性である。研究者によって、書き手・編集者・読み手など焦点の当て方はさまざまだが、発行部数や読者層といった基礎的なデータはやはり重要である。

例えば、本書で参考になるのは、『世界』に関するデータである。第二章によれば、男性愛読誌ランキング（58頁、表1）で、1947年に1位だった『世界』が翌年以降は毎年10位前後に沈んでいる。また、第三章では、同誌が平和問題談話会「第三声明」前後まで発行部数を減ら

し続けることが紹介されている（91頁、図2）。『世界』といえば、リベラルな雑誌の代表格として、常に人気があったイメージを持ってしまいがちだが、本書では、必ずしも高い人気を得ていたわけではなかった意外な事実が明らかにされている。だからと言って、『世界』が重要な雑誌ではなかったと即断することはできないが、このような基礎的なデータを踏まえて紙面分析をする必要性はあるだろう。

もちろん、雑誌の分析には、同時代の政治・外交・経済状況などの理解も欠かせない。「①日清・日露戦争のあった明治期や、アジア・太平洋戦争の起きた昭和戦前期と違い、大正期は平和な時代であった」「②1937年の総選挙で、二大政党は大勝した」「③冷戦期は、米ソ超大国間で常に激しい対立があった」といった文章は、見過ごされがちである。だが、①はシベリア出兵、②は議席を増やしたのは社会大衆党で、政友会と民政党の二大政党は議席を減らしたこと、③は1953年以降の「雪解け」や60年代後半から70年代末のデタントを無視した、誤った記述である。当然のことだが、雑誌分析に必要な場合は、政治史・外交史・経済史の基本的な事実は理解しておかなければならない。

第四に、論争への注目である。「論争の場としてのメディア」を特集した『メディア史研究』第29号（2011年2月）は、新聞、テレビ、ローカル・メディアを扱った論文を掲載しているが、戦後の主要な論争の舞台となったのは、総合雑誌であった（『日本の論壇雑誌』関連年表）。本書で取り上げられた論争だけでも、講和論争・安保をめぐる論争（第三章、88-95頁）、主婦論争・女子大生亡国論（第四章、122-126頁）など枚挙に暇がない。すでに研究蓄積は数多いが、メディア史からの新しいアプローチはあり得るかもしれない。

また、雑誌が衰退していく中で、今後、論争の「場」はどこになるのかも考えなければならない。それは、依然として雑誌なのか、かつての雑誌の機能を担いつつあるとも言われる新書なのか、それともインターネットなのか、あるいは別のメディアなのか。どのような結論が導かれるにせよ、それは雑誌の位置づけや機能を見直す上で大切な議論であろう。

第五に、他媒体との関係である。吉田則昭氏が指摘するように、雑誌は、放送事業や新聞と比較して参入障壁が低く、参入と退出が容易で、また、読者との結びつきが強いメディアである⁷。後者は、本書の第八章で明らかにされているように、『文藝春秋』や『諸君！』『正論』に顕著である。このような特徴を持つ雑誌と他のメディアとの関係は、どう考えればいいのか。

本書では、この問題を考えるための材料が豊富に存在する。例えば、第四章では、「お茶の間論壇」を誕生させながら、テレビに場を奪われていく『婦人公論』が取り上げられている。また、第十章では放送との関係、第十一章ではインターネットとの関係も論じられている。このような他のメディアとの関係性、または、「論壇」外への目配り（あとがき・316頁）によって、雑誌の役割を浮き彫りにしていることも本書の長所の一つであり、雑誌メディア研究に示

唆を与えるだろう⁸。

第六に、史料としての回想の重要性である。第五章や第八章は、編集者や執筆者だけでなく、回想を含むアンケートやエッセイから読者による雑誌のイメージや雑誌との出会い方・読まれ方を調査する分析手法が採用されており、新鮮である。もちろん、回想だけでは不十分である場合は多い。読者層については、投書や読書カードなどの属性情報、紙面の内容分析、既存の読書調査の再分析なども必要であることは、第二章で指摘されている（56-57頁）。だが、第五章や第八章で示された分析手法は、史料が乏しい古い雑誌には特に有益かもしれない。編集者、執筆者、関係者へのオーラル・ヒストリーやインタビューは、専門誌で時折行なわれるが、もっと体系的に実施する必要があるだろう。

第七に、執筆者の特性である。1950年代、清水幾太郎は『世界』でも『婦人公論』でも執筆回数1位であった（第三章、95頁、第四章、118頁、表3-1）。かつて『改造』と『中央公論』は執筆者が重なっていたが、戦後は同じ出版社でも『婦人公論』は、『中央公論』よりも『世界』の執筆者と重なっている。連載小説が重なるのは当たり前だが、評論が重なるのはなぜなのだろうか。読者がどのような執筆者を求めていたかを知るためには、書き手である評論家や学者だけでなく、依頼をする編集者や出版社、あるいは、社会状況の分析が必要である。

また、雑誌が、新書やインターネットと決定的に異なるのが「雑居」性である。評論や小説だけでなく、プロではない一般読者の応募手記も人気を博すことがあり（第四章）、それが一冊にまとめられ、同じ雑誌に掲載されているのである。この特徴を考えると、内容分析ではなく形式分析を行なった第六章のような分析手法も一理ある。

本稿では、雑誌メディア研究を進展させ得るものとして、七つの論点を示した。もとより、喚起される議論はそれにとどまるものではないが、一人でも多くの読者が本書を読むことで、雑誌メディア研究がさらに発展することを願ってやまない。

※本稿は、2014年度日本マス・コミュニケーション学会秋季研究発表会ワークショップ4「雑誌メディア研究の現状—日本の論壇雑誌を事例として」における問題提起報告にもとづいたものである。会場で議論に参加していただいた方々に感謝申し上げたい。

また、本稿は、2015年度日本学術振興会科学研究費「若手研究（B）」（課題番号：26780110）による研究成果の一部である。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 詳細を記せば、紅野謙介『物語岩波書店百年史1「教養」の誕生』、佐藤卓己『物語岩波書店百年史2「教育」の時代』、苅部直『物語岩波書店百年史3「戦後」から離れて』である。
- 2) 『メディア史研究』第34号（2013年9月）は「中・小規模メディアの一断面」特集だが、掲載されている論文・資料紹介は4本とも雑誌を扱っており、実質的に雑誌特集である。この特集号では、在郷軍人会家庭向け雑誌『我が家』など、多様な雑誌が取り上げられている。
- 3) なお、本稿は、本書を題材にした書評論文を意図しているもので、通常の本評とは異なることを、最初にお断りしておく。
- 4) 『マイクロフィルム版 改造』（臨川書店、2010～2011年）。
- 5) 『日本歴史』第740号（2010年1月）。
- 6) ネットワーク図と派閥の配置が興味深い（174・175・177・178頁、図2～5）。
- 7) 吉田則昭「雑誌文化と戦後の日本社会」（吉田則昭・岡田章子編『雑誌メディアの文化史—変貌する戦後パラダイム』所収）、13頁。
- 8) 『婦人公論』はテレビに執筆＝出演者を奪われていくが、もちろん、他媒体との関係を必ずしも対立的に考える必要はない。論壇雑誌ではないが、芸能記事を充実させて発行部数を伸ばした『平凡』のように、戦後の雑誌ではテレビの普及とそれによる芸能人への関心の高まりが、雑誌の隆盛になくてはならないものだった例が多い。

（かたやま・よしたか 英語国際学部准教授）